

指導資料



鹿児島県総合教育センター

国語 第109号

- 中学校，特別支援学校対象 -
平成19年5月発行

基礎・基本の定着を図る中学校国語科学習指導の充実

- 平成18年度「基礎・基本」定着度調査の結果を踏まえた指導法の工夫 -

鹿児島県教育委員会では平成16，17年度に引き続き，平成18年度「基礎・基本」定着度調査（以下「今回」という。）を実施した。

この調査は，学習指導要領が示す基礎的・基本的な内容のうち，「読み・書き・算」等の基礎学力について県全体の実態を把握するとともに，各学校の課題を明確にし，きめ細かな指導法の改善に資するなど，基礎・基本の確実な定着を目的としたものである。

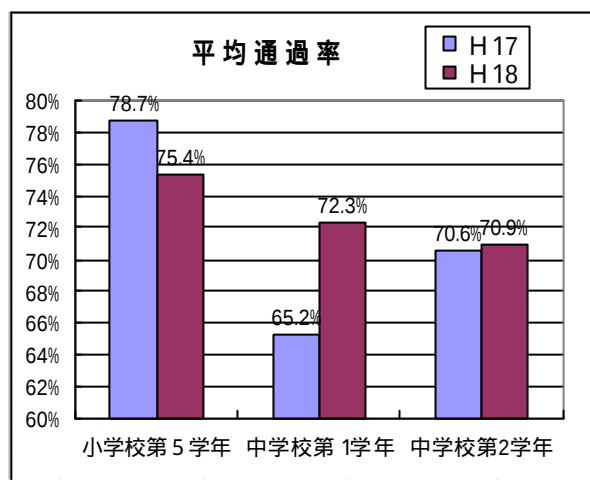
今回も，平成17年度「基礎・基本」定着度調査（以下「前回」という。）と同様に，小学校第5学年で国語，社会，算数，理科，中学校第1学年及び第2学年で国語，社会，数学，理科，英語について，各学年すべての児童生徒を対象に実施した。

そこで，本稿では今回の国語科の結果について前回の結果と比較しながら分析・考察するとともに，基礎・基本の確実な定着を目指す国語科学習指導法の工夫改善について述べる。

1 学力調査の結果と考察

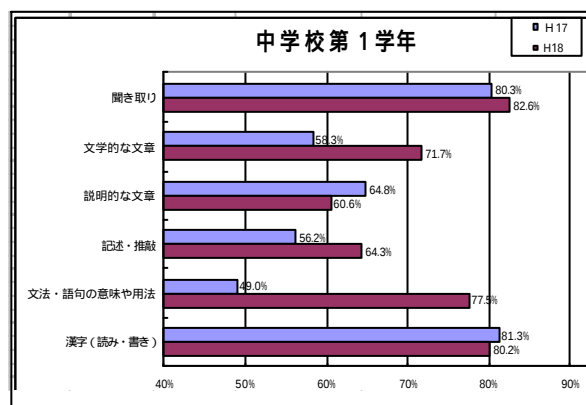
(1) 国語の平均通過率

前回と今回の平均通過率を比較すると，小学校第5学年と中学校第1学年の

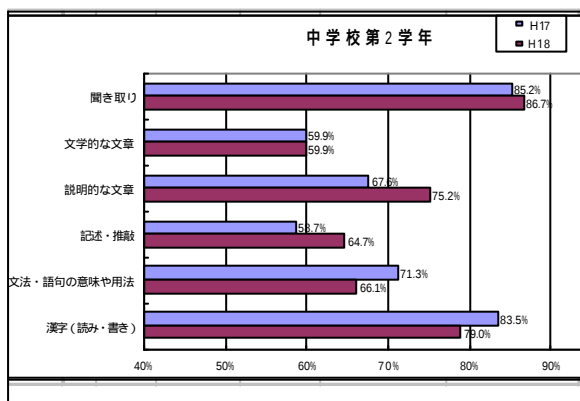


校種間格差が13.5ポイントから3.1ポイントへと縮まっている。特に，昨年度7割に満たなかった中学校第1学年の通過率が，7.1ポイント増えている。小・中学校とも，基礎・基本となる学習内容が概ね定着していることがうかがえる。

(2) 内容・領域別の結果からとらえる課題



内容・領域別の通過率をみると、中学校第1学年においては、前回低い通過率であった「文学的な文章」と「文法・語句の意味用法」の内容が7割を超えた。また、「記述・推敲」の内容についても今回8.1ポイント増え、改善の傾向がみられた。しかし、依然として7割には届いていない。更なる工夫改善が求められる。今回最も低い通過率となった内容・領域は、「説明的な文章」であった。文章構成の読み取りや、読み取ったことに自分の考えを加えて書くPISA型「読解力」の育成を意識した取組がより一層求められる。



第2学年においては、前回低い通過率であった「文学的な文章」が、今回も6割を下回る結果であった。一方、「記述・推敲」は今回6ポイント増え、改善の傾向がみられた。しかし、依然として7割には届いていない。文学的文章については、主題、構成、叙述などを確かめ、人物、情景、心情などを的確にとらえる指導を充実させる必要がある。「記述・推敲」は、教材を読み、筆者の意図や内容を解釈した上で、自分の考えをまとめたり、根拠をもって自分の考えを書いたりするPISA型読解力の視点を授業の中に組み入れていく必要が

ある。また、「文法・語句の意味や用法」の通過率が今回7割に満たなかった。文法にかかわる基本的な知識の定着が求められる。

(3) 通過率の低い問題からとらえる課題

ア 中学校第1学年

(ア) ③ の三(通過率; 40.5%)

本文中の(4)の段落は二つの段落に分かれる。(a)～(d)のどこで分けるとよいか。記号で答えよ。

【(4)段落の本文】

(4) 日本人はその暴れ川を上手に治めて、そこに文化を築いていきます。当然ながら、水を治めるということが、なによりも大切な仕事でした。(a)水を治めなければ土地は使えません。水を治めなければ、水も使えないのです。(b)こうして、水との闘いが始まります。(c)これを「治水」といいます。日本人の水の治め方は、世界でも非常に優れたものでした。(d)ではそれは、どんな方法だったのでしょうか。今のようにがんじょうな堤防を、どこまでもつなげていったのでしょうか。

(富山和子『川は生きている』による)

③ は説明的な文章である。正答(d)の直後にある「では」に着目したり、段落の前後の内容を「治水についての説明」と「治水方法についての新たな問題提起」とに分けて読み取ったりすることができなかったことが通過率の低い要因として考えられる。段落ごとに要旨をまとめたり、小見出しを付けたりする学習の充実が求められる。

(イ) ③ の五(通過率; 32.9%)

本文中の模式図「世界と日本の川の勾配」(省略)は、どういうことを説明するための図か。本文中のことばを使って、三十字以内で簡潔に説明せよ。ただし、「日本の川」、「世界の川」という二語を必ず使うこと。

この設問の誤答としては、「短くて急

である」といった説明にまで至っていない解答や、全く解答していないもの（無答）が多かった。文章のようなテキストだけではなく、図表のようなテキストに対しても、その内容や意図を解釈し、自分の考えを書くことが求められる。この設問のように模式図から日本と世界の川の違いを考え、限られた字数で書いたり説明したりする学習活動を授業展開の中に意図的・計画的に組み入れていく必要がある。

(ウ) ⑤ の三（通過率；41.5%）

＝ 線部には unnecessary 部分があるため、適切でない表現になっている。 unnecessary 部分を □ で囲め。

【二重傍線部の文章】

「思ったことは、『これからの時代は英語くらい話せないとだめだ。』と父にも言われているし、がんばって英語の力をつけたいと思いました。」

この設問の誤答としては、「父にも言われているし」や「がんばって」など、設問の意図を理解していないと思われる解答が多かった。「思ったことは、～と思いました。」の不適切な表現に違和感を感じることができるよう、日ごろから推敲活動に取り組む場面を多く設定したり、クリティカル・リーディング（建設的な批判を伴う読み）の学習を取り入れることが求められる。

イ 第2学年

(ア) ④ の三

(2 活用の種類 通過率；45.8%)

(3 活用形 通過率；42.5%)

次の1～3の各文 - 線部の中に、品詞（省略）・活用の種類・活用形の異なるものが一つずつある。それぞれの記号

を書け。

2 活用の種類

- ア 夏休みの間に三冊の本を読みました。
- イ がんばっても歯が立たない問題でした。
- ウ ひまわりが、太陽に向かって咲いています。
- エ 大河は急がずに、ゆっくり流れます。

3 活用形

- ア わたしが、読みたい本は「坊っちゃん」です。
- イ 水には低い所へ集まる性質があります。
- ウ 春になると、裏山でウグイスが鳴きます。
- エ 思い切り走って、走り抜けました。

活用の種類 の誤答としては、「イ」が多かった。確かに 活用形 の問であれば、「イ」だけが未然形で、残りは連用形である。しかし、ここでは 活用の種類 を問うているので、正解は「エ」の下一段活用となる。活用の種類を見分けるためには、「ない」につながる活用語尾がア段音なら五段活用、イ段音なら上一段活用といった、見分け方についても確実に指導する必要がある。

活用形 の誤答としては、「エ」が比較的多かったが、他の「ア」、「ウ」についても見られた。活用形を学習する際は、「ま・み／も・む・む・め・め」と覚えるのではなく、「読ま（ない）・読み（ます）／読も（う）・読む・読む（とき）・読め（ば）・読め。」と、語幹や活用語尾はもとより、「ない」、「ます」といった連なる語も含めて復唱させることが求められる。

(イ) ② の一（通過率；49.2%）

文章中（省略）に「残酷よ！」とあるが、だれの、どんな行為が残酷なのか。文章中の言葉を使って答えよ。

②はトーベ＝ヤンソン（とみはらまゆみ 富原真弓訳）

「アルベルト」からの出題で文学的文章である。

この設問の誤答としては、「アルベルトの釣り」や「アルベルトが魚に針を刺す行為」が多かった。しかし、ここでの「残酷よ!」は、本文の前にある「まだ生きているうちに、釣り針を突き刺すなんてひどい!」と言ったわたしの言葉とつながることから、「生きたまま」を入れて解答する必要がある。「残酷よ!」の叫びが、アルベルトのどのような行為からもたらされたものかを適切に判断することが求められる。

(ウ) 2 の三 (通過率 ; 49.4%)

- 傍線部 「ちっとも楽しくない。」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次から選び、その番号を書け。
- 1 くぎが斜めに曲がってしまい、引き抜けないのが悔しいから。
 - 2 アルベルトが自分の言ったことに反抗ばかりして腹立たいから。
 - 3 生きたまま釣り針に突き刺される小魚がかわいそうだから。
 - 4 同じ年なのに妙に落ち着いているアルベルトの態度がしゃくにさわるから。

この設問の誤答としては、「1」や「2」が多かった。傍線部の次の一文「三本のくぎが斜めに曲がり、どうしても引き抜けない」に引きずられたり、「まあ、落ち着いて」や「そうだよ」の会話文に表れたアルベルトの冷静沈着さに着目しなかったりした結果ではないかと考えられる。正解は「4」である。

登場人物の心情をとらえる際には、傍線部の前後だけで判断せず、その人物の心情の変化とその要因をとらえる必要が

ある。

(4) 前回の類似問題との比較

前回の問題との類似問題としては、中学校第1学年及び中学校第2学年それぞれで、次の2問ずつが出題された。

【中学校第1学年】

大問	中小問	問題の内容, 前回と今回の通過率
4	2	「未・無・不・非」から当てはまるものを選ぶ問題。 (不可能(前回)・非常識(今回)) 96.9%(前回) ➡ 90.4%(今回)
4	3	「主語・述語・修飾語・接続語」から文の成分を選ぶ問題。 (修飾語を解答とする問題) 41.4%(前回) ➡ 72.4%(今回)

2問とも言語に関する知識・理解を問う設問で、通過率は高かった。特に、文の成分を選ぶ問題の通過率が、前回に比べて31ポイント増えている。修飾語等の文の成分への理解が高まったと考えられる。

【中学校第2学年】

大問	中小問	問題の内容, 前回と今回の通過率
2	3	文学的文章で、主人公の心情に当てはまるものを選び出す問題。 58.9%(前回) ➡ 49.4%(今回)
4	3	与えられた活用語から一つだけ異なる活用の種類を選び出す問題 (連用形と未然形を区別する問題) 49.8%(前回) ➡ 45.8%(今回)

2問のうち、読解力を問う設問は、前回に引き続き低い通過率となった。(前項(3)イ(ウ)で詳述した。)活用の種類を問う

設問も、5割を下回る結果となった。活用形と混同して解答するケースが多い。(前項(3)イ(ア)で詳述した。)

2 結果を踏まえた改善策

(1) 文学的な文章の指導について

文学的な文章の指導については、これまでも、問題解決的な学習による発問、板書計画の工夫改善例を示したり、言語活動例に基づいた学習活動の工夫改善例を示したりしてきた。(『指導資料』国語106・107号)

そこで、今回は「ロールレタリング」で登場人物の立場や心情を思いやる活動及び「登場人物インタビュー」で主人公の内面に深く迫る活動について述べる。

ア ロールレタリングによる指導の工夫

ロールレタリングとは、手紙の受け手と書き手の両方の視点に立ち、役割交換を行いながら交互に思いや考えを往復書簡形式で伝え合うことで、相手の立場や心情を思いやることのできる学習活動である。自己と他者の役割を体験するロールプレイングの発想に基づいていることから、カウンセリング的な考え方を生かした指導方法としても注目されている。

学習活動としては、まず、登場人物に手紙を出すことを意識した上で教材文を読み、場面ごとの心情の変化をとらえることとなる。例えば、『少年の日の思い出』(ヘルマン・ヘッセ)の「ぼく」の心情を場面ごとに読み取る

とともに、まとまりごとに要約することが考えられる。

次に、登場人物の心情の変化に基づいてその人物に手紙を書くとともに、役割を交換して、今度は登場人物になりきって、その手紙に対する返事を書くこととなる。さらに、もう一度役割を交換して登場人物への手紙を書くことで、内容的深まりを自己評価することにもなる。

こうした往復書簡を繰り返し書く活動においては、例えば、実際の便箋を用いてペンで清書させるといった「書写」の指導とのつながりをもたせたり、パソコンであらかじめ作成した書式に入力させ、文書ホルダーに保存するといった情報教育とのつながりをもたせたりすることも考えられる。

なお、学習活動のまとめとしては、往復書簡を教室等に掲示して相互に読み合うとともに、読み合った感想を披露し合うといった相互評価活動を通して、自他の心情把握の違いを認識する場を設定する必要がある。

このように、ロールレタリングは、役割を交換しながら登場人物の人柄やものの見方、考え方などを深く理解するだけでなく、作品世界を読むことを通して自己の内面を見つめることにもつながる。キャリア教育で求められる自分探しや、人間力の育成、自己の浄化(カタルシス)にまでかかわってくる活動とも言える。

イ 架空インタビューによる指導の工夫

インタビューは、生徒が日常的にテレビ等のマスコミを通じて疑似体験している活動である。したがって、架空インタビューを学習活動として設定することは、生徒の興味・関心を喚起するとともに、生徒が主体的に学習を進める一助となるものとする。

学習活動としては、まず、架空インタビューの活動を意識した上で教材文を読み、インタビューの相手になり得る登場人物を選定することとなる。例えば、『走れメロス』（太宰治）の「メロス」や「暴君ディオニス」、「セリヌンティウス」をインタビューの相手として選定し、場面ごとの心情を読み取っていくのである。

次に、登場人物の心情の変化に基づいて、その人物にインタビューしたい内容をまとめることとなる。具体的には、インタビューで聞きたい内容を基に想定問答を作成し、インタビューをする生徒と相手役の生徒の役割分担等をする。自分の想定した答と相手役の答が相違する場合を予想して、更なる問いを用意するなど、実際にテレビ等で行われているインタビュー活動と同様の事前準備をする。この事前準備により、登場人物の心情を深く読み解くことにつながるとともに、想定した答と相手役の答との違いを教材文に戻って分析することで、教材文読解のより一層の深まりが期待できる。

こうした架空インタビューの活動においては、例えば、自作のマイクやテレビカメラといった小道具を用意するなど、生徒の学習活動に対する意欲が高まる工夫を施すことも考えられる。

なお、学習活動のまとめとしては、架空イ

ンタビューでの問答を基に、登場人物の人物像をまとめたり、その人物像の根拠を教材文から指摘し合ったりすることなどが考えられる。

以下に、太宰治の『走れメロス』を基に、架空インタビューの想定問答例を示す。

『走れメロス』 太宰治	
○ 架空インタビューの想定問答をつくろう。	
【想定問答】	
インタビューー	「セリヌンティウスさん、あなたは、メロスの帰りを待っている間、本当にメロスのことを信じ続けることができましたか。」
セリヌンティウス	「はい、わたしはメロスを信じていました。しかし、処刑台に連れて行かれたとき、わたしは初めてメロスのことを疑いました。」
インタビューー	「メロスを信じられなくなったのですね。」
セリヌンティウス	「いいえ、わたしがメロスを信じなかったらだれが信じるのですか。あれは一瞬の迷いに過ぎません。例えばメロスが間に合わなくても、わたしは二度とメロスを疑うようなことはしないと心に誓ったのです。でも、一瞬とはいえ、わたしはこの迷いの罪をメロスに告白しようと思いました。きっとメロスなら、このことを聞いても、わたしを許してくれると信じていましたから。」
インタビューー	「一瞬でも親友を疑ったことを、包み隠すことなく語れるなんて、本当にあなたとメロスは仲がよいですね。」
セリヌンティウス	「ええ。無二の親友ですから。」
インタビューー	「王様もきっとあなたとメロスの友情を見てお考えを変えられるかもしれませんね。」
セリヌンティウス	「そうであればうれしいですね！」

インディア「セリヌンティウスさんどうもありがとうございました。これからもお二人の友情を深めてくださいね。」

(2) 説明的な文章の指導について

説明的な文章の指導については、これまで、PISA型「読解力」の育成の観点から学習指導の工夫改善例を示してきた。

(『指導資料』 国語107・108号)

そこで、今回は「クリティカル・リーディング」の視点から文章を論理立てて読む力を高めるための指導策を述べる。

ア クリティカル・リーディングの意義

『読解力向上に関する指導資料 PISA調査（読解力）の結果分析』の「テキストを理解・評価しながら読む力を高めること」では、クリティカル・リーディングの必要性を次のように述べている。

読む力を高めるためには、テキストを肯定的にとらえて理解する（「情報の取り出し」）だけでなく、テキストの内容や筆者の意図などを解釈することが必要である。さらに、そのテキストについて、内容、形式や表現、信頼性や客観性、引用や数値の正確性、論理的な思考の確かさなどを理解したり、自分の知識や経験と関連付けて建設的に批判したりするような読み（クリティカル・リーディング）を充実することも大切である。（下線部筆者）

下線部は、これまでの国語科学習指導が「テキストを肯定的にとらえて理解する」いわゆる「情報の取り出し」段階に止まってきた現状を示唆していると言える。また、クリティカル・リーディングの充実を図るためには、テキストの内容や意図などを「解釈」とともに、

「理解・評価」したり「建設的に批判」したりする過程を踏む必要があることを示唆しているとも言える。

イ クリティカル・リーディングを伴うリライト活動の工夫例

中学生の発達段階を考えると、教科書教材を批判的に読む段階にまで読みの力を高めることは難しいとの声も聞こえる。しかし、クリティカル・リーディングの力は、テキストの理解、解釈といった前提となる学習過程を一つ一つ踏まえることによって獲得されるものである。まずは基本となる領域の学習を充実させ、その上に立って段階的に授業を展開していく工夫が求められる。

そこで、中学校で学習する説明的な文章教材を基に、小学生にも理解できる文章にリライトする言語活動を仕組むことを構想した。なお、本言語活動は、平成18年度長期研修者 県立加世田高等学校 濱田秀行教諭の「研究報告書」を基に構想したものである。濱田教諭は事前学習として「納得度」で数値化することでミニリライトを体験させたり、文章の論理性の重要性を認識する活動を仕組んだりしながら、生徒のリライト活動への意欲を高めることに取り組んだ。

リライト活動とは、今あるテキストを自らと異なる読み手を想定しながら書き換える活動のことである。大人向けのニュースを小学生向けに「子どもニュース」として放映したり、「子ども新聞」と題して記事を分かりやすく書き換えたりすることなどもこれに当たる。

例えば，中学校第1学年教材「クジラの飲み水」の読み手を小学校第5学年生に設定して，テキストをリライトする活動を構想することができる。この教材には，多くの図表が用いられている。それらを関連付けた上で，自らの判断をすることは「科学的な文章を読んだり，図やグラフを見て答える問題」に対応する日本の生徒たちの課題を払拭することにもつながる。こうした教材を基に，子ども向けのリライトを行うことは有効である。

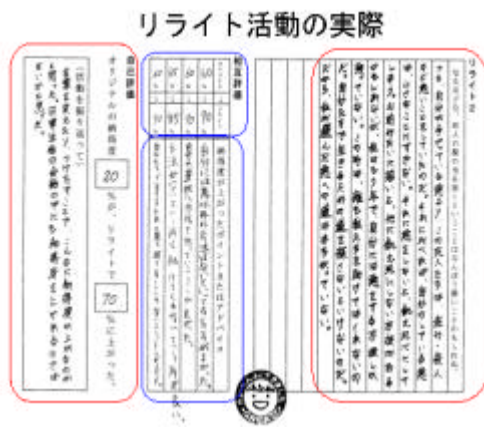


図1 リライト用シート（瀧田教諭作成）

クリティカル・リーディングの充実を図ることは，これから生涯にわたって学び続ける生徒にとって，大切な資質である。井上尚美(1998)は，こうしたクリティカル・リーディングの必要性について，次のように述べている。

子どもは，毎日，いろいろな問題状況に直面し，彼らなりに思考を働かせ，論理を使っている。言語論理教育は，それを自覚させ，自分の考えの筋道や方法が正しいかどうかを反省させ（メタ思考），再構造化させるのである。

「クリティカル」の視点については，情

報の鵜呑みからの脱却や，自分なりに理解・評価しようとする態度を育成することはもとより，メタ認知，つまり，自分の判断等を冷静に判断するもう一人の自分づくりのためにも求められる。これからの時代に求められる人間力育成のためにも，クリティカル・リーディングの充実をより一層図ることが大切である。

(3) 知識・理解にかかわる指導について

知識・理解にかかわる指導については，定着状況の確認を小テスト等で補完するなど，様々な工夫がなされてきたところである。しかしながら，小テストを実施してもその意図が生徒に伝わっていなかったり，小テスト後の更なる手だてが伴わないために一時的な定着に終わってしまったりして，必ずしも十分とは言えない面もあった。

そこで，こうした知識・理解の定着の際には，例えば，接続詞の働き等を定着することは，文章を理解・評価しながら読むだけでなく，分かりやすい文章を書くことにもつながるといった必要性や有用性を理解できるように指導することが大切である。次に，こうした事前指導とともに，知識・理解のより一層の定着を図るためには，例えば，文法の学習において，生徒が日ごろから身近に感じている新聞や雑誌の記事等を活用して，小集団による文法事項の分析活動を行うなど，生徒に日常感を認識させることが大切である。実際の生活の中で活用していく場面を数多く設定することによって，知識・理解にかかわる指導がより一層充実したものとなっていくことを期待したい。（教科教育研修課）